

(平成29年度) 職員業務評価結果

1 こども園の教育及び保育目標

こころづくり、からだづくり、なかまづくりを念頭に置いたカリキュラムを構築し、実践する。そして、卒園時には「知恵と力を出し合って生き生きと遊べる子」となれるように教育及び保育目標を掲げている。

こども園の達成目標、運営方針などを共通理解するために、管理職会議、教育部会議、保育部会議、給食会議、衛生推進委員会等を定期的開催している。これらの諸会議は職員の研修の機会としての役割も担っている。

2 本年度の重点目標

こども園には、保護者や園児、地域住民などのステークホルダーに対する説明責任、そして、教育、福祉機関としての役割・使命といったものを念頭に置いた運営が求められている。これらを達成していくためには、内発的な改革、改善の風土を醸成していくことが重要となる。

また「地域社会で子どもたちを育てる」というよき伝統的慣習が失われつつある中で、この伝統的慣習を生かしながら、「子どもの最善の利益」を共通スローガンに掲げて、豊かな人間づくりができるようにしていく。

さらに、大学付属施設としての特色を鮮明にする取り組みを推進するとともに、こども園に入園した結果、こころやからだの育ち、なかまづくりができるようになったということ、目に見える形で評価できるようにすることで、園の魅力づくりと広報活動につなげていく。

3 評価項目の達成状況

評価対象	結果	理由
I こどもの発達援助	B	<p>発達援助の基本に関しては、5項目のすべてで前年度と比較して、評価が誤差の範囲内ではあるが低下している。</p> <p>健康管理・食事に関する評価は高い評価を維持しており、平成29年度は保育環境や内容に留意した取り組みに加え、栄養士が各クラスを訪問し、食育を行うとともに、園児と食事をしながら、子どもたちの摂食状態を把握することを心がけていたことが高い評価につながっているものと考えられる。</p> <p>保育環境、保育内容に関する項目において評価が低くなっているが、保育環境においては、心地よく過ごせる環境の整備を意識しており、感染症予防のために換気に注意し、温度・湿度に配慮することについてはほぼ全員が心がけている。</p> <p>子どもの気持ちをくみ取りながらの声かけ、子どもの気持ちをくみ取った対応については、全員ができていると認識している。</p>

<p>II 就学前教育の推進</p>	<p>B</p>	<p>教育課程に関しては、普段からカリキュラムの改善に向けた取り組みを行い、幼児の実態、地域性を視野に置いた見直しを行っている。</p> <p>平成29年度は、袋井市スポーツ協会との連携によるサッカー教室を開催したほか、浜松学院大学の講師によるリズムミックの指導や、幼児体育の専門家による体育指導方法の研修成果を教育プログラムに生かすことができた。</p> <p>また発達状況、教育目標に即した用具や遊具の整備については、徐々に改善されつつあり、平成28年度に導入した大型積木による新しい運動遊びは、幼児の主体的な活動を尊重した教育実践として活用する機会が増大した。</p> <p>小学校との連携においては、小学校を訪問して小学生との交流を定期的に行うという行事が定着した。各種行事には小学校の校長先生を始め諸先生の参観を得て、小学校教育との連続性を意識した取組を行っている。今後は、小学校の先生による授業の機会を設けたり、保育教諭が小学校の授業参観をしたりといった、こども園と小学校の教職員の交流を具体化する取り組みを一層促進していくことが必要となる。</p> <p>さらに近隣の保育園との共同活動などを取り入れ、保・幼・小の連携のあり方について協議していくこととなった。</p>
<p>III 子育て支援</p>	<p>C</p>	<p>保護者の育児支援・保育援助については、平成26、27年度に比べて大きく改善されている。これは保護者との間で連絡帳などを通じて情報交換を行っているほか、一日保育体験に加えて、平成28年度から、新たに自由参観週間を設定したことなどで、保護者が子どもたちの発達の様子や子どもたちへの関わり方を学習する機会ともなっている。</p> <p>また、「2歳っこひろばパンダ」と称した2歳児の親子を対象とした子育て支援事業を強化し、同じ内容を2回実施することで、より多くのこどもたちが参加できるように工夫するとともに、専任職員がその任に当たった。</p> <p>平成27年度から、預かり保育を異年齢保育に改称し、保育内容を精査してきた。平成29年度は、試行錯誤の段階ではあるが、年齢や迎えの時間が異なる80名以上の園児を対象とした教育効果の高い取り組みについて、専任職員がその任に当たり、利用希望者が増えている。しかし、平成29年度は、職員配置が困難な状況に見舞われたため、一時預かりの受け入れを制限したことなどを受けて、地域の多様な保育ニーズへの対応が不十分となったため、自己評価が下がってしまった。</p>

		<p>これは各職員の意識の問題ではなく、こども園の職員体制にその原因があったため、次年度は職員の確保が至上命題となる。</p>
<p>IV 地域コミュニティや関係機関との連携</p>	B	<p>大学の附属施設としての立場、役割については共通理解ができており、多くの学生の実習やボランティアを受け入れているほか、地元中学校、高等学校を対象とした職場体験、保育体験の機会提供が定例化してきた。また、昨年同様地域の農家の協力を得て、稲作体験や餅つきなど、食への関心を高めるための活動を展開した。さらに、夏まつりで地元上石野の石進車祭青年による祭り囃子を披露していただくなど、近隣の人たちとの交流が広がってきた。</p> <p>今後も、自治会との連携を一層深め、協力体制を構築していく必要がある</p>
<p>V 運営管理</p>	B	<p>各種行事会議、外部講師による研修会などを通して、情報の共有を図るとともに、保護者に対してはクラスだよりなどを介して情報の発信を行っている。しかし、クラスだよりの発行回数が減少したとの指摘があるため改善していく必要がある。</p> <p>守秘義務については、全職員が高い意識を持っている。管理職会議、教育部会議、保育部会議、給食会議を定期的で開催し、情報の共有の機会とするとともに、各部会議において管理職がスーパーバイズする場ともなっている。</p> <p>副園長を委員長とする平成29年度衛生推進委員会では、職員の心身の健康保持のため、毎週水曜日を定時で帰宅するとともに、浜松学院大学衛生委員会と連携しながら、メンタルヘルスの向上のため、ストレスチェックを実施した。</p> <p>さらに、職員の負担軽減を図るため、袋井市からの補助金制度を活用して、登降園の管理など、園管理システムのIT化を進めることができ、担任としての保育事務負担の軽減につなげることができた。</p>

4 総合的な評価結果

結果	理由
B	<p>I～Vの領域、発達援助、就学前教育の推進、地域との連携、運営管理のいずれもB評価となり、「できている」という結果を得ることができた。しかし、子育て支援領域の中で、「保護者の育児支援・保育援助」に関しては改善の余地が残されている。</p> <p>守秘義務、保護者への情報提供と保護者意見の反映及び安全・衛生管理については、その必要性を含めて高い認識を示している。</p> <p>保育・教育理念や基本方針については教育部会議、保育部会議などを通じて職員間で共通理解がなされるようになってきている。すなわち保護者に対しては、保護者アンケート結果に対する園からの回答を全保護者に配布、またクラスだより、園だよりなどにより、基本方針について保護者の理解を得る機会が増えてきている。</p> <p>しかし、地域の人たちに対する周知は、「あいあい」と称した情報紙を自治会に配布しているが、配布が各学期に1回程度ということで十分とはいえない。今後は、こども園のホームページの有効活用により子ども園の情報を広く伝えていく必要がある。</p> <p>以上、細かな点では改善すべき課題は残されているが、平成29年度は、前年度と比較し大幅な改善点はなかったが、概ね良好な評価がなされている。</p>

5 今後取り組むべき課題

課題	具体的な取組み
(1) 教育課程の改善と職員の資質向上	<p>こども園の各種課題、例えば発達のとらえ方などをメインテーマとして、外部講師を招いての園内研修を実施する他、外部機関主催の研修参加の機会を増やすこと、浜松学院大学付属幼稚園を含めた他園と交流等の経験を通じて、職員一人ひとりの得意領域を生かしたカリキュラムの作成、発表の機会を設けることで職員の持ち味を生かしていく。</p> <p>安全と安心に配慮しながら、子どもの気持ちに添った働きかけを心がけることを基本とし、集団のもつ力を活用できるようにする。</p> <p>我慢する力、チャレンジする意欲など、こころづくり、からだづくりを意識した取り組みをさらに重ねていくことが望まれる。</p> <p>幼児の主体的な活動を尊重した教育実践を積み重ねていくという意識は高まっており、今後は認識しているだけでなく、より具体的な実践につなげていくことが求められる。</p>

<p>(2) 保護者の満足感を高めると共にこども園の理解を深める</p>	<p>保護者が保育体験や自由参観をすることは、こども園の理解と子ども理解を進める上で大切な機会となっていることが保護者アンケートでもうかがえる。平成28年度より自由参観週間を新設したが、今後も保護者参加の機会を多く設けていくとともに、保護者からの意見に対して丁寧に回答をしていくことで、保護者とこども園との協力関係、信頼関係を構築していく。</p> <p>また、自由参観における保護者の参観マナーについて、保護者会と園の連名で注意喚起の文書を配布するなど、保護者会と園との連携が順調に発展してきている。今後も保護者会と園との役割分担と連携を心がけていく。</p>
--------------------------------------	---

6 関係者評価委員の意見

--

平成 29 年度浜松学院大学附属愛野こども園学校評価

(自己評価結果とそれに対する学校関係者評価結果)

※ 評価点は、A (十分に成果があった)・B (成果があった)・C (少し成果があった)・D (成果がなかった) の数値で表す。

評価対象	評価項目	自己評価		学校関係者評価委員会	
		評価点	こども園としての反省と改善策	評価点	学校関係者評価委員会の意見
I こどもの発達援助	<ul style="list-style-type: none"> ・発達援助の基本 ・健康管理・食事 ・保育環境 ・保育内容 	B	<p>発達援助の基本に関しては、前年度と比較して5項目の全てで評価が誤差の範囲内ではあるが低下している。</p> <p>健康管理・食事に関する評価は高い評価を維持しており、平成 29 年度は、保育環境や内容に留意した取り組みに加え、栄養士が各クラスを訪問し、食育を行うとともに、園児と食事をしながら、子どもたちの摂食状態を把握することを心がけていたことが、高い評価につながっているものと考えられる。</p> <p>保育環境、保育内容に関する項目において評価が低くなっているが、保育環境においては、心地よく過ごせる環境の整備を意識しており、感染症予防のために換気に注意し、温度・湿度に配慮することについては、ほぼ全員が心がけている。</p> <p>子どもの気持ちをくみ取りながらの声かけ、子どもの気持ちをくみ取った対応については、全員ができていると認識している。</p>	B	<p>健康管理・食事に関しては、栄養士のクラス訪問などを通じて、食育を意識した取組を充実させようとしている様子が伺える。</p> <p>また、感染症を防ぐために保育室の換気を心がけるなどの取り組みを行うとともに、職員への注意喚起に努めた結果、インフルエンザの罹患児は発生したが、学級閉鎖等は発生していないことは評価できる。</p> <p>さらに、教員同士のサポート、こどもへの言葉かけやこどもの気持ちに沿った対応を心がけるなど、発達援助に関しては成果が上がっていると判断できる。</p>

<p>II 就学前教育の推進</p>	<p>・教育課程 ・学級経営</p>	<p>B</p> <p>教育課程に関しては、普段からカリキュラムの改善に向けた取り組みを行い、幼児の実態、地域性を視野に置いた見直しを行っている。</p> <p>平成29年度は、袋井市スポーツ協会と連携してサッカー教室を開催したほか、浜松学院大学の講師によるリトミックの指導や、幼児体育の専門家による体育指導方法の研修成果を、教育プログラムに生かすことができた。</p> <p>また、発達状況、教育目標に即した用具や遊具の整備については、徐々に改善されつつあり、平成28年度に導入した大型積木による新しい運動遊びは、幼児の主体的な活動を尊重した教育実践として活用する機会が増大した。</p> <p>小学校との連携においては、小学校を訪問して小学生との交流を定期的に行うという行事が定着した。各種行事には小学校の校長先生をはじめとする諸先生の参観を得て、小学校教育との連続性を意識した取組を行っている。今後は、小学校の先生による授業の機会を設けたり、保育教諭が小学校の授業参観をしたりといった、こども園と小学校の教職員の交流を具体化する取り組みを一層促進していくことが必要となる。</p> <p>さらに近隣の保育園との共同活動などを取り入れ、保・幼・小の連携のあり方について協議していくこととなった。</p>	<p>B</p> <p>こどもの発達に応じて、からだづくり、こころづくり、仲間づくりを意識したカリキュラム編成を心がけている。</p> <p>また、座禅教室や袋井市スポーツ協会の指導者によるサッカー教室など、地域性を活かしたカリキュラムを編成している。</p> <p>5歳児は小学校の協力を得て、小学校へスムーズに移行できるよう、計画的に訪問する取り組みを行うなど、就学前教育において、幼児の実態や地域性を視野に置いた取り組みができています。</p>
--------------------	------------------------	---	---

<p>Ⅲ 子育て支援</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の育児支援・保育援助 ・多様な保育ニーズへの対応 	<p>C</p> <p>保護者の育児支援・保育援助については、平成26、27年度に比べて大きく改善されている。これは保護者との間で連絡帳などを通じて情報交換を行っているほか、一日保育体験に加え、平成28年度から、新たに自由参観週間を設定したことなどで、保護者が子どもたちの発達の様子や子どもたちへの関わり方を学習する機会ともなっている。</p> <p>また、「2歳っこひろばパンダ」と称した2歳児の親子を対象とした子育て支援事業を強化し、同じ内容を2回実施することで、より多くのこどもたちが参加できるように工夫するとともに、専任職員がその任に当たった。</p> <p>平成27年度から、預かり保育を異年齢保育に改称し、保育内容を精査してきた。平成29年度は、試行錯誤の段階ではあるが、年齢や迎えの時間が異なる80名以上の園児を対象とした教育効果の高い取り組みについて、専任職員がその任に当たり、利用希望者が増えている。しかし、平成29年度は、職員配置が困難な状況に見舞われたため、一時預かりの受け入れを制限したことなどを受けて、地域の多様な保育ニーズへの対応が不十分となったため、自己評価が下がってしまった。</p> <p>これは各職員の意識の問題ではなく、こども園の職員体制にその原因があったため、次年度は職員の確保が至上命題となる。</p>	<p>B</p> <p>自己評価は、全体的に厳しく評価していると感じるが、特に、子育て支援については、保育教諭の不足から、一時保育を休止したことで評価が著しく低くなっている。これは、職員不足に起因した一過性のもと考えられ、教職員が充足した来年度以降の取り組みに期待する。</p> <p>子育て支援で保護者への育児支援、保育援助、保護者との情報交換や自由参観週間を通じて充実したものになってきたと思われる。</p> <p>また、2歳っこひろばパンダを充実したり、異年齢保育と称した預かり保育の受け入れなどの取組により、子育て世代の期待に応えている点は評価できる。</p>
----------------	---	--	--

<p>IV コミュニティや関係機関との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の社会資源との連携 ・保育実習やボランティアの受け入れ 	<p>B</p>	<p>大学の付属施設としての立場、役割については共通理解ができており、多くの学生の実習やボランティアを受け入れているほか、地元中学校、高等学校を対象とした職場体験、保育体験の機会提供が定例化してきた。また、昨年同様地域の農家の協力を得て、稲作体験や餅つきなど、食への関心を高めるための活動を展開した。さらに、夏まつりで地元上石野の石進車祭青年による祭り囃子を披露していただくなど、近隣の人たちとの交流が広がってきた。</p> <p>今後も、自治会との連携を一層深め、協力体制を構築していく必要がある</p>	<p>B</p>	<p>実習だけでなくボランティア、自主実習などで多くの学生を受け入れている。</p> <p>地域の人材の協力を得て、稲作体験や餅つき、夏まつりの際には地元の「石野音頭」を踊ったり、地域の祭り青年によるお囃子の披露など、園行事への近隣住民や自治会の協力、地域の伝統行事を活かした取り組みなど、地域との交流は十分にできており、地域での子ども園の評価は高い。</p> <p>愛野こども園の園児の大半が地元愛野地区の子どもであることなど、こうした園の取組が地域に受け入れられ、評価されている結果であると判断できる。</p>
<p>V 運営管理</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基本方針 ・組織運営 ・守秘義務の遵守 ・情報提供 ・保護者の意見の反映 ・安全、衛生管理 	<p>B</p>	<p>各種行事会議、外部講師による研修会などを通して、情報の共有を図るとともに、保護者に対してはクラスだよりなどを介して情報の発信を行っている。しかし、クラスだよりの発行回数が減少したとの指摘があるため改善していく必要がある。</p> <p>守秘義務については、全職員が高い意識を持っている。管理職会議、教育部会議、保育部会議、給食会議を定期的に行い、情報の共有の機会とするとともに、各部会議において管理職がスーパーバイズする場ともなっている。</p> <p>副園長を委員長とする衛生推進委員会では、職員の心</p>	<p>B</p>	<p>園児数の着実な増加など、運営管理に関しては、全般によい方向に推移しているが、こども園から地域に発信する情報がまだ不十分ではないか。上石野地区だけでなく、広く愛野地区全体への働きかけも必要である。</p>

		<p>身の健康保持のため、毎週水曜日を定時帰宅日とする とともに、浜松学院大学衛生委員会と連携しながら、メン タルヘルスの向上のため、ストレスチェックを実施した。</p> <p>さらに、職員の負担軽減を図るため、袋井市からの補 助金制度を活用して、登降園の管理など、園管理システ ムのIT化を進めることができ、担任としての保育事務 負担の軽減につなげることができた。</p>		
--	--	---	--	--